

「日本史探求」担当者育成のための教職課程における課題 — 地域を学習教材とした地理歴史融合授業の実験を通して —

小 山 幸 伸

はじめに

本稿は、2018年3月30日に告示された高等学校学習指導要領¹⁾を踏まえ、同指導要領において指摘されている歴史教育、とりわけ「日本史探求」を担う教員を育成するための指導上の課題を考察しようとするものである。

今次改訂については既に多くの意見が発表されており²⁾、歴史教育者や歴史研究者が真摯に改訂の問題点を検討している。筆者が今回の第9次改訂において特に重視したいのは、①「地理総合」と「歴史総合」の登場、②「地理B」（4単位）が「地理探求」（3単位）に、「日本史B」（4単位）が「日本史探求」（3単位）にそれぞれ再編されたことである。大学の教職課程において「社会科」「地理歴史科」を履修するためには、地理教育と歴史教育とを学ぶことが不可欠であるにも拘わらず、近年、高等学校において「地理」を学習しないまま、大学で教職課程を履修している学生が多い。もちろん、そのことで「社会科」教員の資質に欠けていると言うものではない。しかしながら、教職課程において地理歴史科を担当する者としては、「社会科」あるいは「地理歴史科」の教職課程を履修する学生には、「世界史」「日本史」「地理」の学習経験を期待したい。その意味で、今次の改訂における「地理総合」の登場には期待を寄せている。

また同時に、「日本史探求」という科目の登場にも大いに期待を寄せている。『学習指導要領・解説』の「総説」において「改訂の基本方針」が述べられている。そこには「主体的・対話的で深い学び」として、その実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）

について記されている³⁾。そのような授業の一つの到達点として、この「日本史探求」において、高校生が自ら主体的に「調査・研究」を体験することが期待される。そのような授業を高校時代から体験することで、高大接続教育がより高度化することも期待できる。しかし『学習指導要領・解説』を読むと、そのような可能性に期待を持ちつつも、不安な点も多々残る。とりわけ、その授業を担当し得る教員を養成するためには、どのような教育を大学において実施すべきなのか、研究していく課題は多い。

そこで、今次の学習指導要領における「日本史探求」の目標として、地理と日本史を関連付けながら総合的に捉え理解することが求められていることを踏まえ⁴⁾、特定地域を取り上げた地理・歴史融合授業を実験的に実施し、そこから教職課程における教科専門科目としての日本史概論の指導法を検討しようと考えた。本稿作成にあたって、敬愛大学において、千葉県市川市に展開する砂洲の形成とその地域の土地利用の状況を説明し、その地域の自然条件を活用して近世以降の人々は、どのように当該地域でその暮らしを成立させていたのかを解説する授業を実施した⁵⁾。その授業に参加した受講生へのアンケートの回答から、「日本史探求」を担う教員の資質を育成するためには、どのような課題があり、どのような授業展開を考えていくべきかを考察した。

1. 第9次改訂への対応

1.1. 第9次改訂における歴史教育の課題

先に述べたように、第9次改訂において、筆者が重視したのは、①「地理総合」を設置したことで地理の学習者が増加するであろうことと、②「日本史探求」の設置によって「主体的な学習」の機会が増加するであろうことである。

①については、高等学校の教育において地理科目の必修化が復活することによって、大学での教職課程教育における地歴科教育に大いに益すると

考えられる。直接的な影響のある地理系科目への理解が深まるだけでなく、日本史など歴史系科目への理解にも大きく寄与するものと思われる。このことは学習指導要領における「日本史探求」の「目標」において、「(1) 我が国の歴史の展開に関わる諸事象について、地理的条件や世界の歴史と関連付けながら総合的に捉えて理解するとともに、諸資料から我が国の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」⁶⁾と記されていることにもよく表されている。歴史を理解する上で、地理的条件を踏まえて考察することの必要性は、歴史学を学ぶ上で基礎的な事柄とも言えるだろう。そのような事柄を、教育場面で意識して指導できる教員を養成する必要性からも、高等学校において地理系科目を必修科目として学習した経験を持つことのメリットは大きいと考えるのである。それに続く記述において、日本史を「世界の歴史」と関連付けて理解することが述べられている。これは「歴史総合」などの科目において、具体的に取り組まれていくことになる。それに並行して、地理と歴史を関連させて理解することも課題になると考えられる。そのため大学における教職課程教育では、地理的な条件を踏まえて歴史を思考するように指導すること、さらに地理と歴史とを融合させる授業展開を想定した指導を行うことも考えられるのではないだろうか。本稿において紹介する教育実践は、そのような地理・歴史融合授業を実験的に行うことから、地理的条件を踏まえて歴史を理解する方法について、受講生に考察させる機会を作ろうとしたものである。

また同時に、そのような教育を通して「地理探求」における「目標」の「(3) 地理に関わる諸事情について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に探究しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の国土に対する愛情、世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとする

ことの大切さについての自覚などを深める」⁷⁾についても、その指導法

について考察する機会を提供しようとするものである。先に述べたように、第9次改訂における地理系科目については大いに期待を寄せていたのであるが、その内容の中には、具体的にどのように取り扱うべきなのか苦慮する部分があるのもまた事実である。そのひとつが上記の部分、とりわけ下線部である⁸⁾。もちろん愛国心や郷土愛というものが自然な感情の発露として存在することを否定するものではない。しかし、それは学校教育において、具体的にどのように取り扱うべきなのであろうか。将来の学校教育の場面において、この目標を達成しようとする受講生に対して、大学の教職課程では、どのような教育を行うことが求められるのだろうか。非常に苦慮すべき箇所である。その後段の記述から、学習指導要領がエスノセントリズムのような指導を求めていることは明らかである。しかし取り扱い方次第では、そのような意図を持たなくとも、生徒のなかにエスノセントリズムを形成してしまうリスクもある。筆者なりに思考した結果、受講生に地域の地理的条件を示し、そのなかで先人たちの生活史を教えることで、学習指導要領の掲げる目標について、受講生自身が自分なりの指導法について考察する機会を与えることをめざすことにした。

次に②の「日本史探求」の創設については、前述したように「主体的な学び」の到達点として、自ら歴史を探求する姿勢を持たせるために、調査・研究を体験する授業なども設定することが期待できる。その「目標」には、「…諸資料から我が国の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」⁹⁾ことが掲げられている。またこのような技能に加え、「…概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、(中略)考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」¹⁰⁾こと、「よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする態度を養う」¹¹⁾ことが求められている。このような目標を達成するために、歴史的な課題に対して調査をし、議論などを行い考察していく「主体的で対話的な」授業を実施することが想定され

るのである。もちろん毎回、調査・研究を行うことは困難を伴うので、現実的にはそのような授業は最終段階で実施され、それ以前の授業では史資料に基づく考察を中心とした授業展開が想定されるが、そのような授業の際にも、「時代を通観する問いが表現できるように指導を工夫すること」¹²⁾が求められている。そのため、今次の『学習指導要領・解説』において、非常に多くの「問い」を示しているのである。

たしかに歴史への「問いかけ」とは、歴史学の本質とも言える問題である。それなくして歴史学は成立するものではない。E.H.カーが「歴史とは過去と現在の対話」と表現したことは、そのことを端的に表現していると思われる¹³⁾。では、どのような「対話」が成り立ち得るのだろうか。小川輝光氏は「教員」「生徒」「歴史」という三つの主体で捉えることで、歴史教育の構造を理解することを提唱されている¹⁴⁾。小川氏の構想は、「過去との対話」という歴史へのアプローチを歴史教育の場面で構造的に捉えた卓見である。それは、教員が歴史のなかから教材をつくり(A)、教室で生徒に問いかけ(B)、その過程で生徒自身も歴史に接近し認識を形成する(C)という3つの局面で歴史教育が行われる点を構造的に把握するということである。第9次改訂における「日本史探求」の創設は、正に小川氏の提示された(C)の局面を全面的に押し出したものと言えるだろう。歴史教育におけるこの局面は、従前から、教員の創意工夫において実施されていたことではあろうが、このように学習指導要領に位置づけたことは注目に値する。

では、大学における教職課程教育で、そのような指導を担える実力を養成するために、どのような指導を想定するべきであろうか。史学科の学生ならば、日常的な史資料へのアプローチから、歴史への「問い」を想起し、「過去との対話」を経験しているが、他の専攻の学生は、そのような機会が圧倒的に欠乏している。それ故に、『学習指導要領・解説』に多くの「問い」を例示する配慮もなされたのであろう。大学の教職課程教育にお

いては、①史資料の取り扱い、②指導方法、③歴史への「問いかけ」を教えることが改めて求められている。①と③は、歴史教育のなかで従来から行っていたことではあるが、それをより強く意識して教育する力をつけるように教職課程において指導する必要が求められるのである。しかし筆者の調査では、現実に教職課程履修者の多くは、「知識」を修得する必要性を感じ、それに対する学習や授業方法を想定することまでは積極的に取り組むが、歴史的な思考力を高めるために指導の「ねらい」や「目的」を明確にし、授業の実施プランを作成するという具体的な指導を想定することに対しては消極的にしか実行しない傾向がある¹⁵⁾。そのような状況を打破し、歴史への「問いかけ」を考えるような姿勢を構築する授業展開が求められるのである。

1. 2. 実験授業のねらい

2020年1月22日（水）4時限（14：50～16：20）に、敬愛大学3602教室において「日本史概論Ⅱ」（主に近現代史を扱う）の特別授業として、地理と歴史とを融合させた実験授業を実施した。この実験の主旨は、授業終了後に実施するアンケート調査に基づき、受講生の反応から教育実践上の課題を探ろうとするものである。

この授業では、特定地域の地理と歴史を学習することで、地理と歴史の両分野を関連付けて学習することになる。その際に教材とした地域の紹介は次節に譲るが、具体的には千葉縣市川市を取り上げた。同市の中心部にあたるJR総武線の市川駅から本八幡駅の間には、総武線の他に京成電鉄や国道14号が通っており、それらに沿った地域には砂洲地形が見られる。そのような地理的条件を活用した砂洲地域の新田開発や特産品生産の歴史を紹介した。

事前に社会科の教職課程を履修している学生に幅広く参加を呼びかけたところ、当日は、経済学部1年生から4年生12名が参加してくれた¹⁶⁾。

また、社会科・公民科指導法を担当されている山口健一先生も参加してくだされた。

その授業の内容については、末尾に指導案を附録資料として掲載した。詳細はそれに譲る。ここではその授業を行う際に、特に意識したことを簡潔に述べておきたい。まず、地形を教えるので視覚教材を多用した。また新田開発された村の検地の様子や、特産品である梨の商品価値が増大したことを示す史料を提示した。このような史資料を豊富に示すことで、授業の指導法として史資料を活用することと、それらの史資料の成立事情を考察することを経験させ、史資料から歴史への「問いかけ」を行う指導法を想定するように導きたいのである。次に、「地域」に基づく学習を行うことで、先の地形の問題も、実際に現地に赴きフィールドワークを行うことが可能であり、またその歴史も地域の公立図書館に設けられている郷土史コーナーなどを活用することが可能であることを認識させる。これにより、教員自身が教材作成を行う際の取り組み方を認識させるように導きたい。さらに、生徒に地図を活用する技能を身に付けさせる指導力を涵養するために、国土地理院の電子国土webや今昔マップなどの利用法を紹介した¹⁷⁾。このような地域を調査し考察することは、「日本史探求」を担当する教員としては基礎的能力であると同時に、それを生徒に伝えていくことが歴史教育上想定される課題でもある。その上で最終的には、歴史を調べる際に、単に歴史上の著名な「人物」や「事件」を調べるのではなく、その地域の歴史的発展過程を調べることで、地域社会の「構造」を分析し考察する力を形成したい。このことが歴史への「問いかけ」を形成していくことになり、生徒に対して「暗記科目としての歴史」から、「考える科目としての歴史」へと授業を転換する指導力を養成することになると思われる。

以上のような指導を行う実験的授業に対する受講生の反応を分析したのである。ただし、単にアンケートを実施すると、「感想」を記すだけという学生が多い。それでは学生の歴史教育に対する理解が把握できないと

思われる。アンケートの回答には、①授業の感想を述べるレベル、②史資料（とりわけ視覚資料）への注目を述べるレベル、③指導法に着目した意見を述べるレベル、④歴史への問いを考察するレベル、などが想定される。そこで、いくつかの試みを行ってみた。まず、通常の授業と大きく形式を変えて、意図的に一方通行ぎみの講義形式での授業を行った。それによって、「グループ討論などのアクティブ・ラーニングの指導法を採用すべきである」などの意見が出ることが予想される。そこから、そのグループ討論のために、どのような「問いかけ」を形成するに至るのか、あるいは全く「問いかけ」が想定されないのかを確認することができるだろう。また、多くの史資料を提示することで、その授業準備についての意見や、史資料の成立過程などに基づく歴史への「問いかけ」に至るのかを確認したい。既に小川氏が指摘されているが、第9次改訂によって授業の教材づくりにも変化が求められるようになり¹⁸⁾、教材準備の難しさは従来の歴史系科目より増すのではないと考えられる。地域の歴史を研究し、それを歴史教育に活用することで、豊かな歴史教材を作成するということについては、受講生の地元である千葉県の教員による豊富な事例がある¹⁹⁾。それらに学び、自らも歴史教育の教材を作るために歴史へ「問いかける」姿勢が形成されているのかも検証してみたい。明確に記述されていなくとも、その萌芽が見いだせれば、それを教職課程教育のなかで育成することも可能であり、新たな課題の発見につながると考えたのである。それらに加えて、地域の歴史を「近世」に焦点を当ててみた。第9次改訂においては、「歴史総合」での学習を踏まえて、そこで育成された資質・能力を活用して「日本史探求」が展開される構造になっている。そうであるならば、「近現代」を取り上げることが自然であったかもしれない。第9次改訂の学習指導要領では、歴史的環境、歴史資料と展望、国家・社会の展望と画期を古代から近世まで学習することを経て、近現代においてのみ国家・社会に変えて「地域」の文言が登場し、「日本史探求」の授業の最後に「現代の日本の課題

「日本史探求」担当者育成のための教職課程における課題の探求」へと至ることになっている²⁰⁾。この点も踏まえるならば、地域を教材とする時に、「近現代」を問題にすることの重要性について議論する受講生が登場する可能性は十分にある筈である。その点も探りたかったのである。仮に、そのような受講生が存在した場合、主に近現代史を取り扱う「日本史概論Ⅱ」の授業における課題発見につながる可能性があると考えた。さらに「歴史総合」との関連性や、系統的な学習についての意見が出て来るのかも確認したい。歴史を時間軸に沿って扱うのではなく、ある地域のある時代について何らかの主題を設定して取り上げ、そこから歴史的な問題を設定するという教育方法については当然のごとく異論ないしは違和感が持たれる可能性もある。歴史を系統的に学習することに慣れ親しんだ者にとって、唐突に示される教材から歴史の課題を調査・研究し結論を導くことは、どのように映るものであろうか。このような点を確認することが、アンケート調査の目的であり、それを通して教職課程教育における指導上の課題を発見したいのである。その結果については、第3節で述べる。

2. 教材としての地域 ―市川砂洲―

2.1. 市川市の砂洲地形

1) 市川の景観

市川市の地形は、その特質から、おおよそ2つの地域に区分できる。1つは北部・中部の洪積台地であり、もう1つは南部の氾濫原である沖積平野である。房総半島北部に位置する下総台地の西部にあたり、北部に広がるおおよそ20～25メートルの丘陵から南に下がるほどに低くなり、市川から中山を結ぶ「市川砂洲」の線で2～5メートル程度の微高地が形成され、そこから南に平らな沖積平野が展開している²¹⁾。

下総台地は、箱根火山や富士火山を給源とする火山灰が土壌したものである関東ローム層によって地層を構成する台地である。丘陵部（下総台

地)は内部に谷を持ち、最も大きな谷は北部にある。谷を挟んで、大野と柏井、宮久保と菅野、曾谷・稲越と国分などの地域が向かい合っている。これらの谷は、水田として利用されていた。これらの地域では、かつて村人は、低い丘陵の上に屋敷を構えて前面の谷底平地と支谷で水田を耕し、丘陵上に畑を作った。

これに対して低地部は、縄文時代に出現した「奥東京湾」を埋積して市川低地や荒川低地が作られ、さらに江戸川三角洲の前進により市川市南部の低地が作られた。これらの地域では、川のもたらし土砂の堆積により自然堤防を形成した。そのため、この地域では村人は、自然堤防上に、稲荷木・大和田・妙典・本行徳・浦安など江戸川左岸の諸集落を形成した。これら南部の行徳低地では、水田が形成された。また海岸線では、その遠浅の海を利用して塩田が開かれていた。

市川砂洲は、長さ4キロメートル、幅0.5～1.5キロメートルという大きなもので、周囲の低地よりも一段高くなっている。東は中山台地の麓から、西は江戸川に達しており、市川市を海側と山側に二分する「砂の堤防」のような存在である。1917年の高さ4メートルを超える高潮も、この市川砂洲の南端で止まったという記録がある²²⁾。2020年1月時点における市川市の水害ハザードマップ²³⁾を見ると、北の真間川が氾濫した場合でも、南の江戸川が氾濫した場合でも、この市川砂洲が堤防の役割を果たしていることが理解される。

2) 市川砂洲の形成

地球上では、氷期の寒冷期と間氷期の温暖期を交互に繰り返してきた。寒冷期には海水面が下がり、温暖期には海水面が上昇した。関東地方でも、このような海水面の変動により、海岸線の位置は大きく変化した。この過程によって市川市域の地形が形成された。

「縄文海進」と呼ばれる約9～6千年前の急激な海面上昇の後、約6千年前ごろに温暖化が止まり、海面の上昇がとまった。そのため台地南端を

削った土砂が国分川と大柏川の河口付近に堆積して海底が浅くなった。河口の海底が浅くなり、川の水は直接南に向かわず、台地に沿って西に流れるようになり、砂洲を形成した。これが市川砂洲である²⁴⁾。

昭和33年（1958）に市川市平田1丁目の市川電報電話局（現NTT）の建設現場から、コクジラの骨が多数発見された。昭和58年（1983）に肋骨の一部を放射性炭素により年代測定したところ、約5千年前の数値が出ている。当時の東京湾を回遊していたコクジラが6千年前ごろから形成された砂洲に迷い込み、抜け出せなくなり、そこで息絶えたものではないだろうか。このコクジラの骨格の出土などからも、当時の東京湾と市川砂洲の状況を想像することができる²⁵⁾。

3) 砂洲の土地利用

近世において、砂地が多い砂洲上では畑が設けられ瓜・西瓜などが作られていたが、明和6年（1769）に梨の生産を学び²⁶⁾、それ以降梨園が設けられた。『江戸名所図会』によれば当該地域の特産品となっていたようである²⁷⁾。果樹の栽培では桃園も設けられ、さらに近代になって苺栽培も展開された様子である²⁸⁾。また砂洲上には千葉街道が通り、町場も形成され、大正時代には京成電鉄が敷設されていた。土地利用図によると、明治13年（1880）では北の洪積台地上は畑、南の沖積平野は水田、砂洲は果樹園、海岸付近は塩田として利用されていたことが分かる。その後、砂洲上は市街地化していき、やがて水田も畑も市街地化し、北部の一部に畑や果樹園が残り、南部沿岸部が工業地帯化して今日に至っている。土地利用図から市川砂洲付近の土地利用の変遷を見ると、以下の状況が確認できる²⁹⁾。

- ①明治13年（1880）、果樹園として利用されている。
- ②大正8年（1919）、果樹園として利用されている。
- ③昭和22年（1947）、市街地になっているが、果樹園は一部残されていた。
- ④昭和44年（1969）、市街地化が進み果樹園は無くなった。
- ⑤昭和62年（1987）、市街地は南北に拡大し、今日まで継続している。

…③と④の間の高度経済成長期に市街地化が急速に進んだ様子が見て取れる。

⑥平成11年（1999）には、⑤と大きな変化は見られない。

2. 2. 市川新田地域の歴史

1) 近世の新田開発

市川市内には、後述する市川砂洲地域に作られた「市川新田」の他にも、「加藤新田」や「湊新田」がある。「加藤新田」は、江戸横山町の商人升屋作兵衛（名字を許され加藤と名乗る）が新田開発を請け負ったもので、海岸地域を「新塩浜」と称して塩田の経営が行われた。この加藤新田に隣接して「儀兵衛新田」という地名がかつてあったが、こちらは江戸神田の儀兵衛が寛保3年（1743）に開発した新田である。「湊新田」は元禄年間（1688～1704）に湊村から独立してできた村である。これらの地域は、海岸に面しており塩田経営を行った。

江戸川流域の新田開発の他にも、下総台地においても新田開発は実施されていた。主に畑作地としての開発であった。松戸市域や船橋の藤原地区などでは畑作地の開墾が積極的に展開し、松戸市内には今も「○○新田」という地名が数多く残る。例えば高塚新田、串崎新田、高柳新田、田中新田、松戸新田、主水新田、七右衛門新田などである。その他、紙敷新田、伝兵衛新田、九郎左衛門新田、三村新田、大谷口新田などの地名もかつて存在した³⁰⁾。

2) 市川新田の開発

市川新田は、JR総武線市川駅と本八幡駅の間に位置し、旧集落は砂洲上を通る千葉街道（国道14号）の両側に並ぶように位置していた。現在の町名で、新田1丁目・5丁目が砂洲上に位置している。いっぽう新田2～4丁目は、砂洲を南に下った所の行徳低地に位置しており、現在は宅地化が進んでいるが、かつて水田地帯であった。

旧集落の市川新田の開発は、その「新田」の名称から江戸時代のいずれかの検地の後だと思われるが詳細は不明である。この地の名主の田中家の先祖正成が開発したと伝えられている。徳川氏による関東の検地は、天正・文禄・慶長・寛永・慶安・寛文・延宝と実施され、それらの完成形として元禄検地が実施された。田中正成は明暦元年（1655）に没しており、それ以前に開発されたものであるから寛永検地の直後のころと考えられる。市川砂洲の最も高い位置にある地藏山には田中家の墓所があり、田中正成の墓碑である大きな地藏尊の像が建立されている³¹⁾。

3) 元禄検地に見る市川新田村の現状

市川市域の多くは、元禄15年（1702）8月に元禄検地が実施されたが、市川新田では早くも前年3月に実施されていた。『市川市史』に採録されている市川新田の検地帳には、「下総国葛飾郡行徳領市川新田御検地野帳」と表題が記されており³²⁾、検地の際に現場で筆取りが耕地面積・名請人などを記した手帳であることが分かる。33町余りの市川新田では3月18・19日の2日間で検地が実施された。検地に際しては、耕地を丈量する竿取り、その丈量した耕地面積などを手帳に記す筆取りなどを、代官の手代が指揮して実施するものである。村役人は、これらの検地役人を案内して回るのだが、次の史料1はその際に交わした誓紙である³³⁾。これによると、市川新田では名主や村役人のみならず、15名の案内人の百姓が連署しており、20戸足らずの村民総出で対応していた様子が伺える。

また、同じく『市川市史』に採録されている検地請書からは、惣百姓が立ち会って水帳を写し取り確認した上は、以後異議を申し立て訴訟を起こすことがないことを村民連名で名主八右衛門宛てに提出したことも判明する³⁴⁾。

以上の検地の結果から、田方、畑方の比率を示したものが次の表1である。ここから、江戸時代の農民が、自然条件に対応した農業を行っていた様子が確認できる³⁵⁾。なお、上田・中田の割合は、北部丘陵部が小さく、

〈史料1〉

<p>差上ケ申一札之事</p> <p>一今度当村田畑屋敷并野山林等就御検地、地所 不残御案内仕、忝畝歩も落地無御座候事</p> <p>一今度所々二而、道代溝堀堤堀代の類奉願御除被下候通り 以来迄相違仕間敷候事</p>		<p>右之通致相違百姓仲間二而以来出入御座候ハ、何様之 曲事ニ茂可被仰付候、勿論御検地中御役人衆者 不及申御供之衆下々迄何二而茂御非分成儀少茂無御座候 尤壳掛ケ借貸一切無御座候、為後日惣百姓連判一札 指上ケ申候、仍如件</p> <p>元禄拾四年巳ノ三月</p>	
<p>池田 新兵衛様</p> <p>比企 長左衛門様</p> <p>平岡 三郎右衛門様</p> <p>御検地御役人衆中</p>		<p>下総国葛飾郡市川新田</p> <p>名主 八右衛門 印</p> <p>組頭 儀左衛門 印</p> <p>同 宇左衛門 印</p> <p>同 庄右衛門 印</p> <p>案内</p> <p>百姓 久右衛門 印</p> <p>(他十四名の名を連記)</p>	
<p>如此御証文指上ケ申上ハ、以来少茂申分無御座候、 為其惣百姓連判一札入置候、以上</p>			

南部低地部は大きい。砂洲地域に位置する市川新田村は、総耕地面積に占める割合は、田方が67%、畑方29%であり中間的な位置であった。

表2に示した数値から、田方に占める割合で見ると、下田と下々田合わせて78%、畑方に占める下畑と悪地下々畑が64%、田方・畑方の耕地の等級比率から、その生産力は、決して高くないことが分かる³⁶⁾。耕地面積全体で見ても、上田・中田合計が15%、下田・下々田合計が53%、上畑・中畑合計が11%、下畑・悪地下々畑合計が18%であり、生産の中心が下田や下々田であった様子が確認されるのである。

次に、表3から市川新田村内部の持高を見ると、名主の八右衛門が、田方549.70畝で村内の26.80%、畑方291.98畝で村内の33.16%を所持していることが分かる。また名主と組頭の4軒の所持高を合せた村内比率は、田方53.30%、畑方50.79%であり、村内の指導者層がおよそ半分の耕地を所持している様子が見て取れる。とりわけ生産力が高い上畑は平田境にのみ存在していたが、名主の八右衛門はそのなかの57%を所持している。先の検

表1 市川市域の各村の耕地種類の比率

			田方合計	畑方合計	屋敷地	総面積
丘陵部	大野村（殿台）	面積（畝）	5145.28	3234.29	79.14	8460.11
		比率	61%	38%	1%	100%
	大野村（御門・迎米）	面積（畝）	5275.11	5104.23	90.26	10471.00
		比率	50%	49%	1%	100%
	柏井村	面積（畝）	4031.02	4138.04	153.01	8322.07
		比率	48%	50%	2%	100%
	宮久保村	面積（畝）	3644.12	2111.22	106.02	5862.06
		比率	62%	36%	2%	100%
若宮村	面積（畝）	500.06	2736.24	35.20	3272.20	
	比率	15%	84%	1%	100%	
丘陵部合計	面積（畝）	18595.59	17324.02	463.63	36387.44	
	比率	51%	48%	1%	100%	
砂洲	市川新田	面積（畝）	2194.29	929.19	128.26	3253.14
		比率	67%	29%	4%	100%
低地部	稲荷木村	面積（畝）	2293.00	1395.27	86.19	3775.16
		比率	61%	37%	2%	100%
	原木村	面積（畝）	1706.02	557.01	107.20	2370.23
		比率	72%	24%	5%	100%
	高谷村	面積（畝）	?	1189.07	163.27	?
		比率	?	?	?	?
	上妙典村	面積（畝）	980.08	308.21	117.11	1406.10
		比率	70%	22%	8%	100%
	下妙典村	面積（畝）	1093.07	505.06	135.07	1733.20
		比率	63%	29%	8%	100%
	下新宿村	面積（畝）	454.19	313.06	88.18	856.13
		比率	53%	37%	10%	100%
本行徳村	面積（畝）	8442.00	2778.09	912.23	12133.02	
	比率	70%	23%	8%	100%	
低地部合計	面積（畝）	14968.36	5856.70	1445.98	22273.84	
	比率	67%	26%	6%	100%	

出典：『市川市史 第2巻古代・中世・近世』（市川市、1974年）、298～299頁第3表参照。

注1：面積の数値（単位は畝）は同書に従った。丘陵部・低地部の合計は、各村の総面積の数値を合計したものである。

注2：低地部合計の数値は、高谷村の畑方・屋敷地の数値を除いたものである。

地誓紙では、村民全員が連署していることから惣百姓が一致して検地に臨んでいる体制が見て取れたが、所持地の実態は、このように持高において歴然たる格差が存在していたことが判明している。そもそも、先に見たように市川新田村内では、下田・下々田、下畑の割合が大きい。そのような

表２ 市川市域の耕地等級別面積

			上田	中田	下田	下々田	悪地 下々田	田方 合計	上畑	中畑	下畑	下々畑	悪地 下々畑	畑畑	畑方 合計	屋敷地	総耕地 面積
丘陵部	大野村 (殿台)	面積(畝)	596.29	632.06	2199.01	1717.22		5145.28	506.00	465.26	720.07	1542.26			3234.29	79.14	8460.11
		比率1	12%	12%	43%	33%		100%	16%	14%	22%	48%			100%		
		比率2	7%	7%	26%	20%		61%	6%	5%	9%	18%			38%	1%	100%
	大野村 (御門・遊米)	面積(畝)	479.17	723.17	2386.07	1686.00		5275.11	486.29	637.00	1851.11	2129.13			5104.23	90.26	10471.00
		比率1	9%	14%	45%	32%		100%	10%	12%	36%	42%			100%		
		比率2	5%	7%	23%	16%		50%	5%	6%	18%	20%			49%	1%	100%
	柏井村	面積(畝)	469.07	566.02	1661.06	849.29	484.18	4031.02	260.07	584.05	1331.15	976.13	985.24		4138.04	153.01	8322.07
		比率1	12%	14%	41%	21%	12%	100%	6%	14%	32%	24%	24%		100%		
		比率2	6%	7%	20%	10%	6%	48%	3%	7%	16%	12%	12%		50%	2%	100%
	宮久保村	面積(畝)	233.08	295.16	2212.28	902.20		3644.12	291.27	802.26	1016.29				2111.22	106.02	5862.06
		比率1	6%	8%	61%	25%		100%	14%	38%	48%				100%		
		比率2	4%	5%	38%	15%		62%	5%	14%	17%				36%	2%	100%
	若宮村	面積(畝)		53.16	242.21	203.29		500.06	258.12	900.04	1030.19	547.19			2736.24	35.20	3272.20
		比率1		11%	48%	41%		100%	9%	33%	38%	20%			100%		
		比率2		2%	7%	6%		15%	8%	28%	31%	17%			84%	1%	100%
砂洲	市川新田	面積(畝)	143.01	349.05	1157.25	544.28		2194.29	115.05	214.11	586.17		13.16		929.19	128.26	3253.14
		比率1	7%	16%	53%	25%		100%	12%	23%	63%		1%		100%		
		比率2	4%	11%	36%	17%		67%	4%	7%	18%		0%		29%	4%	100%
	稲荷木村	面積(畝)	440.11	529.07	1186.09	137.03		2293.00	239.10	149.05	105.26	326.08		575.08	1395.27	86.19	3775.16
		比率1	19%	23%	52%	6%		100%	17%	11%	8%	23%		41%	100%		
		比率2	12%	14%	31%	4%		61%	6%	4%	3%	9%		15%	37%	2%	100%
	原本村	面積(畝)	264.14	478.07	461.21	489.28	11.22	1706.02	113.10	290.13	98.07	40.06		14.25	557.01	107.20	2370.23
		比率1	15%	28%	27%	29%	1%	100%	20%	52%	18%	7%		3%	100%		
		比率2	11%	20%	19%	21%	0%	72%	5%	12%	4%	2%		1%	24%	5%	100%
	高谷村	面積(畝)	?	?	?	?	?	?	127.05	79.29	292.23	167.15	212.00	309.25	1189.07	163.27	?
		比率1							11%	7%	25%	14%	18%	26%	74%		?
		比率2															
低地部	上妙典村	面積(畝)	131.26	276.08	318.18	253.16		980.08	108.10	43.00	137.03		20.08		308.21	117.11	1406.10
		比率1	13%	28%	32%	26%		100%	35%	14%	44%		7%		100%		
		比率2	9%	20%	23%	18%		70%	8%	3%	10%		1%		22%	8%	100%
	下妙典村	面積(畝)	100.06	291.29	505.02	196.00		1093.07	60.10	152.12	178.27	97.17	16.00		505.06	135.07	1733.20
		比率1	9%	27%	46%	18%		100%	12%	30%	35%	19%	3%		100%		
		比率2	6%	17%	29%	11%		63%	3%	9%	10%	6%	1%		29%	8%	100%
	下新宿村	面積(畝)	144.06	163.25	146.18			454.19	86.29	107.23	100.08		18.06		313.06	88.18	856.13
		比率1	32%	36%	32%			100%	28%	34%	32%		6%		100%		
		比率2	17%	19%	17%			53%	10%	13%	12%		2%		37%	10%	100%
	本行徳村	面積(畝)		2748.14	4317.2	1375.26		8442.00	393.04	332.20	762.20	1038.23	251.02		2778.09	912.23	12133.02
		比率1		33%	51%	16%		100%	14%	12%	27%	37%	9%		100%		
		比率2		23%	36%	11%		70%	3%	3%	6%	9%	2%		23%	8%	100%

出典：『市川市史 第2巻古代・中世・近世』（市川市、1974年）、298～299頁第3表参照。

注：田方・畑方の各等級の上段の比率1はそれぞれ田方・畑方合計に占める比率を示し、下段の比率2は総面積に占める比率を示す。

表3 市川新田村民の持高

単位：畝

		平田境					石台・新道添					溜下					田方合計	畑方合計	総計			
	耕作者	上畑	中畑	下畑	(a) 合計	(b) 屋敷地	上田	中田	下田	下々田	(c) 合計	(d) 悪地 下々畑	中田	下田	下々田	(e) 合計	(f) 下畑	(g) c+e	比率	(h) a+d+1	比率	b+g+h
名主	八右衛門	57.45	93.85	128.58	279.88	29.40	15.05	61.79	300.70	3.08	380.62	12.10	86.46	82.62		169.08		549.70	26.80%	291.98	33.16%	871.08
組頭	儀左衛門	7.29	6.02	49.96	63.27	9.29	22.89	14.58	55.78	67.09	160.34		18.81	78.59	39.67	137.07	2.27	297.41	14.50%	65.54	7.44%	372.24
組頭	宇左衛門	3.14	1.25	41.22	45.61	7.21	3.06	18.79	21.94	27.24	71.03		7.21	20.00	19.16	46.37	3.15	117.40	5.72%	48.76	5.54%	173.37
組頭	庄右衛門	8.23	11.28	20.47	39.98	7.21	14.06	6.30	18.95	55.55	94.86		6.18	22.60	5.25	34.03	1.00	128.89	6.28%	40.98	4.65%	177.08
百姓	久右衛門	15.30	14.05	31.91	61.26	6.44	4.18	41.3	38.95	30.76	78.02		6.81	21.71		28.52	0.15	106.54	5.20%	61.41	6.97%	174.39
〃	勘左衛門		9.11	12.29	21.40	3.05	6.51	10.62	17.83	17.04	52.00		1.15	36.57	8.24	45.96		97.96	4.78%	21.40	2.43%	122.41
〃	権兵衛	2.17	19.41	12.77	34.35	4.00	10.49		29.95	20.30	60.74		4.47	22.46	9.24	36.17	3.08	96.91	4.73%	37.43	4.25%	138.34
〃	久兵衛			25.02	25.02	6.20														25.02	2.84%	31.22
〃	三左衛門			31.58	31.58	5.45	13.35	2.19		21.16	36.70		5.40	30.36	18.10	53.86		90.56	4.42%	31.58	3.59%	127.59
〃	七兵衛			33.61	33.61	5.08	1.13		20.21	35.56	56.90		3.54	12.41		15.95		72.85	3.55%	33.61	3.82%	111.54
〃	惣右衛門	5.42	2.15	17.09	24.66	3.10	6.24	1.22	14.90	10.23	32.59		8.24	13.66	10.12	32.02	0.24	64.61	3.15%	24.90	2.83%	92.61
〃	喜右衛門	4.37	11.10	14.28	29.75	3.29	10.45	7.16	24.26	16.24	58.11		4.04	20.18	6.12	30.34	1.00	88.45	4.31%	30.75	3.49%	122.49
〃	喜左衛門	3.17	10.16	8.51	21.84	6.27	8.37	2.12	16.32	25.19	52.00		5.04	14.57	10.32	29.93		81.93	4.00%	21.84	2.48%	110.04
〃	金左衛門	4.16		32.78	36.94	3.06	4.24	3.08	22.10	12.23	41.65		2.46	11.68		14.14		55.79	2.72%	36.94	4.20%	95.79
〃	勘兵衛		6.29	8.13	14.42	6.07		4.27	9.47	6.28	20.02		4.21	8.11		12.32		32.34	1.58%	14.42	1.64%	52.83
〃	半右衛門	2.52	2.17	14.15	18.84	9.10	7.16	5.06	12.07	14.51	38.80	1.06	5.10	18.85	1.20	25.15	1.00	63.95	3.12%	20.90	2.37%	93.95
〃	仁右衛門		8.00	21.86	29.86	2.21	5.33	5.09	24.26	31.17	65.85		4.57	23.75	11.32	39.64	4.06	105.49	5.14%	33.92	3.85%	141.62
〃	仁兵衛		3.13	9.34	12.47	4.05														12.47	1.42%	16.52
〃	太兵衛		9.14	7.42	16.56	1.19														16.56	1.88%	17.75
他	長栄寺			10.08	10.08															10.08	1.14%	10.08
〃	郷屋敷					4.24																4.24
合計		113.22	207.11	531.05	851.38	125.91	132.51	146.40	627.69	393.63	1300.23	13.16	173.69	438.12	138.74	750.55	15.95	2050.78	100%	880.49	100%	3057.18
比率		13.30%	24.33%	62.38%	100%		10.19%	11.26%	48.28%	30.27%	100%		23.14%	58.37%	18.49%	100%		67.08%		28.80%		100%

出典：『市川市史 第6巻近世史料下』（市川市、1972年）、292～310頁。

村落にあって、多くの平百姓は相当に零細な規模で生産を行っていたのである。このような地味の悪い自然条件のなかで、生活を維持するために戦っていた農民の生活を想像することができる。

4）果樹栽培

前述したように、砂洲上の村々では、地味が悪い砂地のため、瓜や西瓜を生産していたが、明和6年（1769）に八幡村の川上善六が美濃地方の梨の生産を学び、この地に導入した。彼の事績を顕彰する碑が、八幡の葛飾八幡宮に建立されている³⁷⁾。川上善六は、当時梨の栽培が盛んであった尾張・美濃地方の地質が、木曽川・長良川・揖斐川の沖積地であり、八幡付

近と同じ砂地であったことに注目したようで、尾張藩の許可を得て、梨の接ぎ穂を持ち帰った。その際に、接ぎ穂を枯らさぬように、道中、新しい大根を買い求めては、それに挿し替えながら持ち帰ったというエピソードがある。その後、葛飾八幡宮の別当寺である法漸寺の境内に2千坪を借りて梨園を開いたのである。

川上善六が積極的に地元の人々に梨の栽培技術を普及させたことで、八幡を中心に梨栽培が広まり、特産品の「八幡梨」として江戸にも高値で出荷されるようになった。やがて菅野、平田、真間、鬼越などの砂洲上の地域から、中山、宮久保、さらには市川北部に広まり、さらに松戸、鎌ヶ谷、船橋と東葛飾一帯にも広まっていったのである。その様子は、寛政期に編纂を開始し、天保年間に7巻20冊で刊行された『江戸名所図会』にも、「梨園、真間より八幡へ行道の間にあり、二月乃花盛ハ雪を欺に似たり、李太白の詩に梨花白雪香と賦したるも諾なりかし」と記されている³⁸⁾。

このように市川砂洲上の村々では、梨の栽培が盛んに行われていた。この間の事情を示す興味深い史料が『市川市史』に採録されている³⁹⁾。

〈史料2〉

五右衛門殿	菅野村	文政四年	然上ハ当巳十月ノ御勝手次第ニ可被成候、以上	貴殿江売渡シ申候	此度金子入用ニ付、書面之通り	右ハ貴殿之畑我等扣作仕罷在候所、	此代金拾六両也	一梨子木六拾五本并ニ諸品共	売渡シ申梨子木証文之事
	親類	巳ノ十月							
	義兵衛	菅野村							
	四郎三郎	菅野村							
	親類	菅野村							
	義兵衛	菅野村							

ここには、「貴殿の畑」とあることから、五右衛門所持の畑にある梨木を、菅野村の四郎三郎が金16両で当の五右衛門に販売したという内容になっている。この史料によると、五右衛門の畑を四郎三郎が「扣作」（控

作) しているのであるが、この「控作」とは、五右衛門が耕作していない畑を耕作したという意味であろう。そのため、そこにある梨の立木65本および諸品についての権利は、土地の所有者である五右衛門ではなく、耕作者の四郎三郎の所有となり、その立木に関する権利を譲渡したことに對する代価が16両ということである。今日でも、立木や果樹に付着したままの果実は、地盤所有権とは別に保存登記ができ、譲渡や登記をすることができる。おそらく同様の思考が形成されていたことを示すものと考えられる。ここでこの思考を生み出したものは、特産品となった梨の商品価値である。

3. 受講生の反応

3.1. アンケート（授業評価アンケート）の結果

アンケートは、15項目について5段階で評価する形式と、自由記述の形式で実施した。各項目と、それぞれの評価ポイントの平均値を示すと以下のようにであった。

	質 問 項 目	平均値
1	この授業のプロジェクトの趣旨・目的（地理・歴史を相互に関連させて理解させる授業を想定する力を涵養する）は理解できた。	5.00
2	この授業全体（地理編・歴史編）の内容（市川地域の地形と、その土地利用の特質）を理解できた。	4.67
3	今回の授業は、1時間の授業の中に地理と歴史を融合させるのではなく、地理分野と歴史分野に分けたことで理解し易くなった。	4.25
4	地理分野の授業内容について、Web上での地図の活用や、過去の地図と対比させて歴史的な景観を探ることができた。	4.75
5	地理分野の授業内容について、市川砂洲の形成や、台地や砂洲、低地の利用について理解することができた。	4.75
6	歴史分野の授業内容について、近世期の新田開発や特産品の生産などの地域住民の生活の歴史を理解することができた。	4.67
7	歴史分野の授業内容について、自治体史を活用することや、博物館を活用すること、史跡などを活用する技能を修得できた。	4.67
8	歴史分野の授業内容について、各種の資料を読み取り、そこから歴史的な生産活動の実態などを考察することができた。	4.67

(表のつづき)

9	今回の特別授業は、地理歴史融合授業というプロジェクトの趣旨に沿った教育活動であったと思う。	4.83
10	今回の特別授業は、学習指導要領の「目標・内容・内容の取扱い」が実践された教育活動であったと思う。	4.42
11	今回の授業は、生徒の理解を促すものになっていると思った。	4.17
12	今回の授業で取り上げた地域は適切であった。	4.67
13	自分も教師になったら、地域を教材とした授業を実施してみたいと思った。	4.75
14	自分も教師になったら、地理歴史を融合した授業を実施してみたいと思った。	4.42
15	この授業は、自分にとって満足ができるものだった。	4.75

注：平均値は、小数点以下3桁を四捨五入した。

このアンケート結果からは、この授業に対する主旨は参加した受講生全員の理解を得られていた様子が確認できる。また授業内容についても、おおよそ理解している様子も確認できるが、項目3と項目11の数値が低く興味深い。その要因として、初めて学習する内容を、一方的に講義する形式にしたことが考えられる。時間を懸け、受講生自身にも体験させるような授業形態を行えば、さらに理解を促進させることも可能であったかも知れない。また授業形態の問題のみならず、内容を詰め込み過ぎている可能性や、私自身の説明能力の問題もある。

3. 2. 自由記述（良かった点・改善点）から見えて来るもの

次に、自由記述の内容を紹介する。回答番号を付しているが、無記名で実施したため、回答者は特定できない。回答中の下線とそれに付した番号は、筆者が便宜上記したものである。また明らかな誤字は修正し、授業の主旨に直接関係のない感想は削除したことを予め断っておく。

ここでの感想については、第1節において述べたように、①授業の感想を述べるレベル、②史資料（とりわけ視覚資料）への注目を述べるレベル、③指導法に着目した意見を述べるレベル、④歴史への問いを考察するレベ

「日本史探求」担当者育成のための教職課程における課題
ル、などが想定される。以下、具体的な記述を示し、受講生の歴史教育に
対する理解度を確認したい。

回答No.1

- ・①砂洲などの写真を使った時に、赤丸などで囲まれているともっと理解しやすいかなと感じた。
- ・オルソン画像を使った時に、②強調したい部分の断面図も見なかった。
- ・今昔マップの利用…③グループワークなどで「年代順にならべかえ」などを行っても良いかなと感じた。
- ・中学校での授業だったら、その地域になじみがあって、具体的な場所を言われてもイメージしやすいと思うが、高校の授業だと、その地域以外から通学している生徒にとってはイメージしづらいかなと感じた。
- ・④ハザードマップの砂洲の部分にも赤ラインなどを引くと良いと感じた。
- ・⑤授業のキーワードとなる写真をもっと増やしてもいいのではと感じた。
「クロマツ」…「これ歩いていてよく見ない？」とか聞ける。
- ・⑥まとめが大きいかなと感じた。→パワポに表示されていたまとめを前提に、市川市のまとめをしても良いと感じた。
- ・全体を通して…⑦その土地を知っている人(今回なら市川市)じゃないとわかりづらいかなと感じた。写真をもっと表示しても良いかなと感じた。

下線部の多くは視覚教材に対する感想や、取り上げた地域について言及していることが特徴的である。下線③では指導法にも触れている。下線⑥の指摘は、段階的に具体的な知識を積み上げる学習の必要性を述べている。また下線⑦の指摘も、そのような思考に通底するものであろう。今回の授業では、取り上げた地域についての知識は理解の必要条件ではない。具体的な地域はあくまで例示に過ぎない。附録資料として掲載した指導案の「思考の構造」に示したように具体から抽象へと考えさせたかったのだが、具体的な事実認識の第1段階から、上位の抽象的段階に導くことの難しさ

を示している。

回答No.2

- ・ 今昔マップの使い方を説明した後、そのマップの使い方だけでなく、今と昔を比べ、縄文海進が進んだこと、そして海岸線の現在までの移動のしかたや、土地利用状況の変化の説明へのつなげ方が見事だった。
- ・ 地名から地域の地形の特徴を探ることができるといったところで、真間＝崖というのが、理解が追いつかなかった気がする。時間的に難しいのかもしれないが、何か一つ地名をピックアップして説明・解説してもよいと思った。
- ・ ①市川新田の検地誓紙のところ、市川の新田がそもそも他の地域の新田より新しく開墾されたものの証明として「中世からの村とは違い上層だけが仕切るのではなく、みんなで仕切っている」、この言葉から「なぜ？」という生徒の気持ちが生まれるやすく、考える力を伸ばすことができると思った。
- ・ 今日の授業を受けて。個人的には、歴史に地理を混ぜるより、②地理に歴史を混ぜる方が新鮮で、多方の側面からの授業で面白かったと思う。歴史に地理はどうしても地理の要素が消えかかってしまう気がして、少し無理に掘り下げると地理要素が出てきているが、ちょっと難しい感じがした。

この回答も視覚教材への注目が見られるが、それを活用した指導法を意識していることが分かる。また下線②に示したように、地理と歴史の融合として、地理に歴史的条件を加味して考察することに新鮮さを感じている。いっぽう、市川新田の村落の構造というものにも関心が向いたことが下線①から分かる。この関心は、村落の構造などを研究することから社会構造の歴史的な理解へと発展し、歴史への「問いかけ」を形成する萌芽となり得る可能性がある。なお、太字にした部分の「新田」は「村落」のことを

取り違えた誤解を含むものである。

回答No.3

- ・授業の最初で①単語紹介の際に何を覚えてほしいかなど先行させて教えるのが良いと思いました。②今昔マップon the webの活用法が良いと思いました。その中の地図記号の確認につなげているのが良かったと思います。③ハザードマップから砂洲の高さを理解させるのが面白いと思いました。
- ・④石高を現在の量で表してみると量の大きさが分かりやすくなるのではないかと思いました。
- ・⑤丘陵部と低地部を比べて市川新田がどちら寄りかを気づかせた方が、市川砂洲の理解につながると思いました。また、丘陵部と低地部を比べるのではなく、丘陵、低地、砂洲で特徴を出させた方が良いと思しました。またそこでできる作物なども出させると良いと思しました。

下線①は、知識の習得を意識した典型的な感想である。また下線④も普段使い慣れていない単位を明確に示すことで、知識・理解を促進させる授業展開を意識していることが分かる。それに対して下線②と③は、史資料の取り扱いに対するものであった。このように授業に対して知識を優先する姿勢は強いものの、史資料の扱いという能動的な学習を志向する姿勢も現れている。下線⑤は、授業での説明が十分に伝わっていなかった部分もあるようだが、これらは授業のテーマ設定にもつながり得るものであり、地理分野のみならず、歴史分野における歴史への「問いかけ」を設定する可能性をも示すものであろう。

回答No.4

- ・①今昔マップを使って今と昔の地図を比べられるところがよかったと思

う。市川の地形とハザードマップを使い砂洲が少し高くなっていることもわかるし、どこが水没するのかがわかるようになっていてよかったと思う。

- ・ 1 時間目は少し②一方通行になっていたと思う。
- ・ ③市川砂洲上の地域は果樹園に利用されていた理由を、ヒントをあたえながら自分で考えさせて発表させていたところがよかったと思います。
- ・ 市川新田の開発者を一から調べていたことと、④開発者である田中家のお墓の写真をとって興味を引いていたのでよかったと思います。
- ・ ⑤史料などを活用してよかったと思う。

下線②は、予想通りの感想と言える。そこからの指導方法の対案などを想定していくことにつながることになるだろう。それに対して下線①や④・⑤は、史資料を提示したことへの感想である。自ら調査した史資料を教材として活用することに意識が向けられている。下線③は、教員が設定した「問い」に対して受講生に思考させ発表させるという指導法に意識が向いていることが分かる箇所である。

回答No.5

- ・ 授業において、少しペースが速く、①一方的に話している授業だったの
で、生徒に対する働きかけを増やすべきだと感じた。
- ・ また、画像を見せた時に、これは知っているよね？と言われても、知らない事があるので、②そこで生徒何人かに問うのもありだと思いました。

下線①も②も、一方通行の講義形式に対する感想である。「探求」の授業には、そのような指導法が相応しくないと感じたのであろう。この点は、今後の指導法学習への貴重な出発点となるものである。

回答No.6

- ・私たちは、教員を目指す立場であるため、当時の歴史を振り返る時間が少なかったが、実際の生徒を対象にする場合は①当時の歴史を振り返る時間を増やした授業を行いたいと感じた。
- ・②図や史料・資料を授業に取り入れることで、授業に深みが生まれる。教材研究を行う上で良い勉強になった。
- ・③生徒に考える時間、それが分からない生徒のためにヒントを用意しておく。今後の授業準備に必要なことを学ぶことができた。

下線①は時代を追って歴史を考察する学習を重視する立場から出た意見である。そのような学習を原則とする「日本史B」に慣れた者からすると、「日本史探求」には違和感を抱く可能性がある。しかし当然、「日本史探求」の学習においてもその前提としての通史学習は求められる。その面では、「歴史総合」での学習経験がある「近現代」などの取り扱いにおける指導に活かしていける感想である。また下線③は、この科目の学習における「問いかけ」と、それに基づき思考させる時の指導上の工夫に意識が向かっていることを物語っている。下線②からは、史資料の活用を行う教材研究についても認識が成立していることが分かる。

回答No.7

- ・問の部分は、①グループワークにした方が、コミュニケーションがとれていいと思った。
- ・歴史と地理を90分で分けて一気にできたから理解しやすかったけど、50分ずつやってあいたら難しくなると感じた。

下線①は、一方的な講義形式に対して、グループワークなどの指導法に着目している様子が見て取れる。このような指導法への意識から、さらに

発展して、歴史への「問いかけ」の内容へとつながっていくことを期待したい。

回答No.8

- ・①今日のように、一緒に連続した授業なら理解できると思った。実際に学校の授業だと少し間隔があいてしまうと難しいと思いました。
- ・②地図の変化を並べてわかりやすかったです。
- ・③時代の流れがごっちゃになってしまう人がでてきてしまうと思った。

下線①のような授業時間の構成についての感想や、下線②の視覚教材などが提示されたことで理解がしやすくなることの経験が、やがて指導法への研究へとつながることを期待したい。下線③は、このような特定テーマに基づく主題学習に対する本源的な疑問であろう。特定テーマにおける「問い」に対する仮説を、史資料を調査し活用することで検証し、自らの解釈や画期の表現へと至る学習は、たしかに生徒の理解のレベルによって効果が大きく異なる。その点への危惧も考えて指導法を摸索することを期待したい。

回答No.9

- ・①地歴融合授業と一概に言っても様々なやり方があるということを知りました。
- ・②地理の方はグループワークを用いて自分達で市川の地形の仕組みやどのような土壌なのか調べさせてもいいのかなと思った。
- ・今回は地理・歴史連続で授業を行っていたが、③実際は間隔が空くため地理の内容がとんでしまわないよう支援を行わなければならないと感じた。

下線①のように、指導法への探求の萌芽が見て取れる。また②からは、その指導法としてグループワークを行うことや、フィールドワークなどの可能性を探ろうとするものである。また下線③は、教員による支援のあり方を意識していることが分かる。このような感想からは、教員として指導する立場で授業を捉える能動的な意識が芽生えていることが確認できる。

回答No.10

- ・ ①丘陵部、低地、砂洲での土地利用について調べさせ、ジグソー学習をさせると、地理の地形と土地利用、どちらの理解もできると思いました。
- ・ 今回は2時限つづきで、地歴を融合させる授業展開でしたが、時間があいてしまうと融合させるメリットが薄れてしまう気がしました。なので、②1時間で融合させても良いのかなと感じました。

下線①の記述から、このような授業には「ジグソー学習」が適していることを理解している様子が伝わる。既にある程度、指導法の学習を教職課程の授業などで経験していることが分かる。それ故に、授業構成の時間配分などにも思いが至っているのであろう。

回答No.11

- ・ 地理は時間の都合上1時間だったが①2時間だともっと理解できると思った。
- ・ ②国土地理院（電子国土web）の使用は良かったが、もう少し時間をとってもよかった。
- ・ 市川の土地利用は復習として地形を示しつつ、③グループワークで調べ学習やジグソー的な感じの方が理解できると思う。
- ・ 市川の中の地名から地形が予想できるのはよかったが、ハザードマップと照らし合わせるところで④地名の意味を予想させてもいいと思った。

- ・市川の歴史は説明だけでも知識がある生徒は理解できるが、⑤知識がない人はわからないと思った。
- ・土地利用の歴史は面白いと思った。

下線①～④はいずれも、指導法に対する学習成果を反映させたものであることが想像される。先のNo.10と同じように「ジグソー学習」を提案していることから、その点は理解できる。それ故に、下線①・②に見られる時間数の指摘や、下線④のアクティブ・ラーニングの提案がなされたのであろう。また歴史教育へのアプローチにおいては、下線⑤は回答No.1にも見られるように、対象とした地域の正確な知識を獲得することに重点が置かれており、筆者の授業が想定した「思考の構造」の通りには認識を発展させることができなかったことも分かる。このように知識に重点を置くこと自体が悪いことではないが、今回は、教材とした地域への知識が不十分であったとしても、対応できるものであったと思われるだけに、筆者の授業の未熟さも含め残念であった。

回答No.12

- ・①授業一方的に聞いているだけは辛かった。
- ・②今昔マップを生徒全員がスマホで利用し確認していけば、他の授業でもすぐ開いて地図を読み取る力が向上すると思う。
- ・史料の読み取りのための簡単な口語訳があると生徒が理解しやすいので、③問に対するグループワークが展開しやすいと思う。
- ・今回は先生がまとめをあらかじめ書いていたが、④いくつかのキーワードを出して自分でまとめさせるのもいいと思う。

下線①の感想から、下線②の作業や、下線③のグループワークでの「問い」への取り組み、下線④の「まとめ」の在り方など、指導法への考察に

至っている。このように実験授業への参加から、指導法への考察に至るといふ、将来の教員として能動的に授業に参加する意識を有している様子が確認できる。

3. 3. アンケート結果に基づく授業の課題

以上の回答の結果に基づき、授業の課題について最後に述べたい。

まず、第1節でも述べたように、意図的に一方通行の授業にしたことから、指導法について考察することを誘発したのであるが、その点に触れた回答はやはり目立った。通常の筆者の授業は、むしろ教員が話す時間が少なく、学生の報告や、「遊び」を含めた能動的な作業を通して展開している⁴⁰⁾。それだけに、今回の授業が通常の日本史概論でのアクティブ・ラーニングと異なり、講義形式であったことに対する批判が多数見られることは予想されたが、単に、そのような感想に止まらず、具体的に生徒主体のアクティブ・ラーニングを想定した指導法について言及した回答が見られた。特に、具体的に「ジグソー法」⁴¹⁾という提案をしている回答があったことは注目に値する。今回の授業であれば、第1ステップにおいて、各グループ（ジグソーグループ）に分け、市川市に見られる地形と砂洲地域の歴史的な土地利用について均等な学習をする。第2ステップにおいて各グループ内で「地形の特徴を調べる」、「土地の利用状況を調べる」、「元禄検地の結果を調べる」、「特産品などの生産物を調べる」などのテーマを専門的に学習する人物を決め、元のグループを離れてテーマ別に学習させる別のグループ（エキスパートグループ）を作りエキスパート活動を行う。第3ステップでは、元のジグソーグループに戻り第2ステップでの学習成果を、それぞれのエキスパートが担当部分を説明し合って、各自でまとめるという学習である。このような学習形態が「日本史探求」の授業において有効であると受講生が考えていることが分かる内容である。このように指導法についての知識や理解が深まっていることは、現在の大学教職課程で

の学習成果であると評価できる反面、指導法への偏りが気になるところである。「どう教えるのか」ということに対する研鑽は重要な課題であるが、「何を教えるのか」ということに、改めて真摯に取り組む必要性が増していることを示しているのではないだろうか。

次に、多数の史資料とりわけ視覚資料を提示したことに対する反応である。受講生にとっては、初めての学習内容でもあるので、イメージを湧かせるための取り組みとして、積極的に視覚資料を提示したことや、今昔マップの活用などについての感想を述べた回答も目立った。学習内容のイメージを作り出すためには、視覚に訴えることが重要であることを受講生が理解していることを示している。その一方で、『市川市史』などに基づく古文書などの史料も提示したのであるが、そのことに対する回答は少なかったように思われる。豊富な史資料を提示することが、授業の理解に有効であることは理解しているようであるが、そこから教材研究を想定する回答は1例程度しかなかったことは残念である。例えば、受講生からは、近世の古文書などの史料を調査し、村落構造を考察する授業を、週3単位で実施する「日本史探求」で指導する上での課題は何か、現在へとつながる「問い」は何か、などの質問が出て来るようであればならない⁴²⁾。いっぽう通史理解の前提がないことによる難しさについての回答が数例あった。「日本史探求」において、教材準備を行う際の難しさは、史資料へのアプローチの難しさだけではなく、通史理解の前提がないことにも起因する可能性がある。近現代史であれば、少なくとも「歴史総合」の学習による歴史へのアプローチ経験があり、それを踏まえた生徒の歴史理解に基づく教材準備が想定しやすくなる可能性はある。受講生の回答からは、教員が史資料を選択し、それを活用する授業を想定するなど、教材準備に対する困難さに十分には思いが至っていない状況も見えて来る。したがって授業準備ができる指導力を涵養することが求められることを示しているのではないだろうか。

最後に、歴史への「問いかけ」を構築することにつながる可能性である。従前の「日本史B」では時代の流れに沿って歴史を考察することを重視していたが、「日本史探求」では「問い」の形成から「仮説」を立てて、自ら「解釈」を構築する構造となっている。それだけに歴史学の研究に近づいていることになる。この点については、回答No.2の下線①において、中世以来の名田百姓村と近世の新田村との構造的な差異について言及した授業内容への感想があった。またその他にも、「問いかけ」の形成へと至る萌芽的な要素が見られる回答も数例あった。このような萌芽的な段階から発展させていくために、受講生の歴史に対する関心を「事件」や「人物」を暗記するような段階に止めるのではなく、その時代の社会構造を理解する段階へと導くことが教職課程の歴史系教育の課題となる。歴史学を学ぶ時に、「歴史が好き」という素朴な動機から始めることまでは否定する訳ではないが、尚古趣味として歴史に携わるのではなく、歴史学として過去の事象にアプローチする科学的な手法を学ぶべきである。そもそも歴史学は科学なのかということまで含めて⁴³⁾、史学科以外の学部学生に歴史学そのものを学ばせることは相当な困難を伴うとは思いますが、教職課程履修生には歴史を科学的に考察するように導くことが課題として存在するものと考ええる。そのような過程を経ることで、歴史教育の場面での「問いかけ」を形成することになり得るのである。

むすび

本稿では、第9次改訂において創設された「日本史探求」を担当できる社会科教員を、大学の教職課程において生み出すための課題を明確にしようとした。そこで、実験的な授業を行い、そのアンケートから、受講生の歴史教育への理解度や、歴史に対する学習段階を把握し、彼らの現状と、どのような課題が存在するのか考察した。以下その内容を3点にまとめて本稿の結びとする。

1)「どう教えるのか」と同時に、「何を教えるのか」を考える姿勢に導くこと。

現在の教職課程教育においては、その指導法の研究および教育は、筆者の学生時代とは比較にならないほど充実している。それぞれの教科内容に相当する各学科の専門教育こそ大学教育の王道であり、教育学科でもない限り、教え方など「チョークとトーク」で十分と後方に押しやられていた時代に比べると隔世の感がある。現在では、教職課程を履修している学生は、むしろ指導法の学習こそ王道と考え熱心に取り組んでいるように感じる。しかし方法論のみが突出してしまつては、方法論のための方法論になり、「どう教えるのか」のみに終始してしまう危険性がある。「何を教えるのか」と「どう教えるのか」とを両輪として学ぶ意識を高めていくように、改めて受講生を導く必要がある。

2) 教材準備ができるだけの授業への理解と歴史への理解を養うこと。

教師として歴史のなかから自分なりの問題を発見する。言い換えるならば「歴史を切り取る」作業を行うことができる力を養成する必要がある。自らが歴史を切り取るとは、具体的には史資料を選択することになる。そのためには、史資料への理解を深めていくべきなのである。そして自らが選択した史資料を活用する授業を想定することを通して、教材準備ができる指導力を涵養することが必要である。

3) 科学としての歴史学の体系を学び、歴史に「問いかける」力を養うこと。

科学としての歴史学の体系を学ばせ、歴史学的なアプローチを学ぶことで、尚古趣味的な歴史好きを克服し、歴史を科学的に思考させる。そのことによって、歴史教育の場面において、歴史への「問いかけ」を形成することができるようになることが必要である。

注

- 1) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説地理歴史編』（2019年、東洋館出版社）参照。以下、本稿では、同書を『高等学校学習指導要領・解説』とのみ記す。
- 2) 『歴史評論』819号（2018年7月）では「教育・教育改革の危機と歴史教育」、『歴史地理教育』881号（2018年7月）では「高校「社会科」の改変」、『歴史学研究』979号（2019年1月）では「時評・学習指導要領の改訂をめぐる」が、『歴史評論』828号（2019年4月）では「特集／歴史教育の「転機」にどう向き合うか」という特集が組まれている。『歴史評論』819号では、鈴木哲雄「社会科歴史教育論からみた新学習指導要領」など5本の論文が、『歴史地理教育』881号では、石山久男「小中高の学習指導要領改定で教育はどうなるのか」など4本の論文が掲載されている。また『歴史学研究』979号では、米山宏史「学習指導要領の改訂と高校「社会科」教育の課題」、西村嘉高「新しい高等学校学習指導要領をめぐる」が掲載され、『歴史評論』828号では、成田龍一「「学習指導要領」「歴史総合」の歴史像をめぐる」や、小川輝光「探求する日本史は何を語るか」など、8本の論文が掲載されている。皆川雅樹「歴史を「教える」「学ぶ」—歴史教育のナワバリへの挑戦—」（前川修一・梨子田喬・皆川雅樹編『歴史教育「再」入門 清水書院、2019年）も参照した。
- 3) 『高等学校学習指導要領・解説』3～4頁。
- 4) 『高等学校学習指導要領・解説』193頁。
- 5) 実施に先立ち、被験者の学生には研究主旨を説明する時間を設け、アンケートには積極的に建設的な批判を寄せてほしいことと、成績等に影響を及ぼすことがないこと、アンケート結果は研究以外には利用しないことを説明した。研究利用に同意した学生からは承諾書を提出してもらい実験授業に参加してもらった。なお、アンケートは無記名で行った。
- 6) 『高等学校学習指導要領・解説』193頁。なお、下線は筆者が付したものである。
- 7) 『高等学校学習指導要領・解説』83頁。なお、下線は筆者が付したものである。
- 8) 米山宏史は、「グローバル化時代に対応可能な人材の育成と愛国心の涵養という2つの要素が新学習要領の本質を構成している」（注2前掲書38頁）と指摘している。ただし学習指導要領における愛国心についての記述は、第9次改訂以前からあり、「中学校学習指導要領」においても同じ趣旨の記述がある。この愛国心教育は、遡れば1966年に中教審が「期待される人間像」を発表して以来の問題であり、教育現場における課題であり続けていると言えるだろう。

- 9) 『高等学校学習指導要領・解説』 193頁。
- 10) 『高等学校学習指導要領・解説』 194頁。
- 11) 『高等学校学習指導要領・解説』 195頁。
- 12) 『高等学校学習指導要領・解説』 197頁。
- 13) E.H.カー著（清水幾多郎訳）『歴史とは何か』（岩波新書、1962年）参照。
- 14) 小川輝光註 2 前掲書64頁。
- 15) 拙稿「社会科教職課程受講生の意識と学修成果」『敬愛大学研究論集』 第96号（2019年）。
- 16) 参加者の構成は、日本史概論を履修中の者（3名）、履修済みの者（6名）、今後履修する予定の者（3名）であり、必ずしも筆者のコントロール下にはいない者のみで構成されていなかったことは断っておく。そのため後述するアンケートの数値は参考程度としてのみ把握する。
- 17) 国土地理院、地理院地図（電子国土Web）<https://maps.gsi.go.jp>（最終アクセス日 2020年 5月25日）。埼玉大学教育学部、谷謙二（人文地理学研究室）作成、時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」<http://ktgis.net/kjmapw/>（最終アクセス日 2020年 5月25日）。
- 18) 小川輝光註 2 前掲書63頁。
- 19) 千葉県歴史教育者協議会の活動が夙に知られる。『学校が兵舎になったとき』（青木書店、2004年）、『千葉県の戦争遺跡をあるく』（国書刊行会、2004年）など、同会による研究成果は多数あるが、それらの全てを列挙すると厖大になるので割愛させて頂く。
- 20) 『高等学校学習指導要領・解説』 259～263頁。皆川雅樹註 2 前掲書12頁参照。
- 21) 市川市の地形の概観については、以下の書物を参考にした。市川市史編纂委員会編『市川市史』（市川市、1974年）、市立市川考古・歴史博物館編『図説・市川の歴史』（市川市文化振興財団、2006年）、市川市史自然編編集委員会編『市川市史 自然編』（市川市、2016年）。
- 22) 市立市川考古・歴史博物館編『図説・市川の歴史』（市川市文化振興財団、2006年）15頁。
- 23) 市川市ホームページ、市川市水害ハザードマップ「地図面」参照。<https://www.city.ichikawa.lg.jp/common/000291162.pdf>（最終アクセス日 2020年 3月 1日）。なお、2020年 5月にハザードマップがリニューアルされ、現在の水害ハザードマップの地図面は以下のURLである。<https://www.city.ichikawa.lg.jp/common/000330863.pdf>（最終アクセス日 2020年 5月18日）。
- 24) 市川市史自然編編集委員会編『市川市史 自然編』（市川市、2016年）9～10頁。
- 25) 市立市川考古・歴史博物館編『図説・市川の歴史』（市川市文化振興財団、2006年）23頁。
- 26) 市川市史編纂委員会編『市川市史 第2巻』（市川市、1974年）527頁。
- 27) 石川英輔・田中優子監修『江戸名所図会 下巻』（評論社、1996年）。

- 28) 「市川の町・地名の由来」No.23 (『広報いちかわ』602号)。
- 29) 市川市史自然編編集委員会編『市川市史 自然編』(市川市、2016年) 47～55頁。
- 30) 『日本歴史地名大系』(平凡社) 参照。
- 31) 市川市史編纂委員会編『市川市史 第2巻古代・中世・近世』(市川市、1974年) 313～314頁。
- 32) 市川市史編纂委員会編『市川市史 第6巻近世史料下』(市川市、1972年)。
- 33) 市川市史編纂委員会編『市川市史 第2巻古代・中世・近世』(市川市、1974年) 291頁。
- 34) 市川市史編纂委員会編『市川市史 第2巻古代・中世・近世』(市川市、1974年) 292～293頁。
- 35) 市川市史編纂委員会編『市川市史 第2巻古代・中世・近世』(市川市、1974年) 298～299頁・第3表。
- 36) 市川市史編纂委員会編『市川市史 第2巻古代・中世・近世』(市川市、1974年) 298～299頁・第3表。
- 37) 市川市史編纂委員会編『市川市史』では川上善六の梨移植を明和6年のこととしているが、葛飾八幡宮にある顕彰碑の説明板には明和7年とある。
- 38) 石川英輔・田中優子監修『江戸名所図会 下巻』(評論社、1996年)。
- 39) 市川市史編纂委員会編『市川市史 第2巻古代・中世・近世』(市川市、1974年) 530頁。また同書には明治元年(1868)に、梨木を質入した際の史料が採録されている。その場合も、土地を立木と分離して質入しており、梨木が高い商品価値を持つようになっていたことを示している。
- 40) 拙稿「「遊び」を取り入れた日本史授業」『敬愛大学研究論集』第92号(2018年)
- 41) 友野清文『ジグソー法を考える ―協同・共感・責任への学びへ』(丸善ブラネット、2016年)などを参照。
- 42) 日高智彦「高校世界史のゆくえ」『歴史評論』819号では、「世界史探求」に比して「日本史探求」は資料に対して詳細な指示がある点を指摘しつつも、「はたして週三単位でそれが可能だろうか」と疑問が呈されている。受講生からは質問が出なかったが、授業を見学して下さった山口健一先生からは、古文書などの史料へのアプローチの困難さや、授業時数の問題など、このような調査・研究を体験させる形式の授業の準備においては、現在につながりやすく、「問い」を設定しやすい近代史の授業で実行することが有効ではないかのご指摘を頂いた。受講生にも、その点が気づけるように指導することが課題なのであろう。
- 43) この問題については、遅塚忠躬『史学概論』(東京大学出版会、2010年)を参照。

(附録資料)

地歴融合授業学習指導案

日時 2020年1月22日(水)
場所 敬愛大学3号館6階3602教室
指導者 小山幸伸

1. 単元名:「身近な地域の地形的特質とその活用の歴史」(地歴融合授業)

2. 単元観

地理歴史科の授業は、地理と歴史の両者の相互関連のなかで多面的・多角的に考察し思考することを目的として行うものである。これは、平成30年告示の「高等学校学習指導要領 第2章第2節 地理歴史」の第1款「目標」に、「(2) 地理や歴史に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、概念などを活用して多面的・多角的に考察」することが掲げられていることに基づくものである。かかる目標を達成するために、地理の授業においても、歴史の授業においても、地理・歴史を融合させて理解し考察する力を涵養する授業が求められる。

また、同じく第1款「目標」には、「(3) …多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の国土や歴史に対する愛情…についての自覚を深める」ことが掲げられている。この点について、「国民」としての自覚や、国土や歴史への愛情を形成する前提として、自らの生活基盤のある地域の自然環境や、そこからどのような影響を受けて地域の先人たちが当該地域を発展させたのかを学習する特定地域の地理と歴史を融合した授業を想定することが可能となるだろう。グローバル化が進む社会において、世界の諸地域の多様性を理解するためにこそ、自らが住む地域の自然環境を知り、その自然環境に働きかけた先人たちの暮らしのなかに地理的特質や歴史的発展を学ぶことの意義は大きいのではないだろうか。

かかる教科の目標を達成するために、受講生に身近な地域である千葉県市川市域における地形を取り上げ、その地域についての地理的学習と歴史的学習を体験することで、両科目を融合させて学ぶことの重要性を認識させる単元を設定した。

同地域の地形は、洪積台地である下総台地と谷底低地、縄文海進から後退期に形成された海岸地形である砂洲地形、沖積平野の行徳低地などが形成されている。その形成過程と特徴を理解することと、その地域の自然環境が人々の生活に与えた影響を歴史的に考察すること、それと同時に人々がその自然環境にどのように働きかけて生産活動を営み、経済生活を成り立たせていたのかを歴史的に考察する教材とした。そこでの学習は、「地理探求」の「2 内容 A 現代世界の系統地理的考察」

の「(1) 自然環境 イ (ア)」において「地形、気候、生態系などに関わる諸事象について、場所の特徴や自然及び社会的条件との関わりなどに着目して、主題を設定し、それらの事象の空間的な規則性、傾向性や、関連する地球的課題の要因や動向などを多面的・多角的に考察し、表現すること」に基づくものである。

また当該地域においては、近世期に新田開発が進展し、果樹園が営まれ特産品である梨の栽培が行われている。近世以前から下総台地に囲まれた谷底低地や海に面した沖積平野である行徳低地の水田開発が行われていたが、近世期には下総台地上を畑地として開発することや、臨海部での塩田の新田開発、砂洲上の新田開発が行われた。このような新田開発の歴史や、砂洲上での果樹栽培、臨海部での塩田開発は近世期の貨幣経済の発達に伴う商品経済に対応するものである。このような地理的条件を踏まえた地域の開発の歴史や、特産品を巡る歴史を学習することは、「日本史探求」の「1 目標」に掲げられている「(1) 我が国の歴史の展開に関わる諸事象について、地理的条件や世界の歴史と関連付けながら総合的に捉えて理解するとともに、諸資料から我が国の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」ことに繋がるものである。具体的には、市川市域での元禄検地の結果に基づき田方と畑方の割合を示す資料から、その地形などと関連付けて土地利用の状況を考察することや、特産品である梨の栽培に関する土地売買の資料から、貨幣経済の進展について考察することを想定した単元を設定した。これは、「日本史探求」の「2 内容 C 近世の日本と世界 (3) 近世の国家・社会の展望と画期 (歴史の解釈、説明、論述)」に示されている「産業の発達、…近世の庶民の生活と文化の特色」を知る単元として位置づけられる。

3. 指導観 (単元を通して育みたい能力)

本講義を受講する学生は、教職課程の学生であり、社会科の教員免許状を取得することを目標としている。そのため、彼らは地理歴史の教育目標を踏まえて学習指導を行うことを修得する必要がある。地理、日本史、世界史をそれぞれ学習する際に、地理ではその地の歴史を関連させて学習することや、日本史や世界史では地理的条件を学習することを促すように指導することを修得することになる。このような学習をさらに一歩進め、特定地域を選び、その地域の地理的学習と歴史的学習を行うことで、人間と自然環境との相互依存関係を踏まえた歴史的発展過程をより理解することになるだろう。

このような授業を体験することで、地理と歴史の両者を関連させて理解し考察し易くなる。その際に、特定地域の地理分野の学習と、歴史的分野の学習の2時間の構成とした。そうすることで、受講生の理解はより容易になると考えた。また、この学習を通して、生徒に歴史の学習とは、必ずしも有名な歴史的事件や人物を知ることだけではなく、その社会の構造を理解することであることを知らしめる可能性も高いだろう。

具体的な指導内容としては、以下のことを想定している。地理分野においては、

海岸の小地形としてどのようなものがあるのかを知ること（知識）と、webで地図を検索しそれを活用すること（技能）、地図を有効に活用してその土地利用を考えたり説明したりすること（思考力・判断力・表現力）などを課題としている。これは学習指導要領における「地理探求」の「3 内容の取扱い(1)」に「エ 学習過程では取り扱う内容の歴史的背景を踏まえることとし、政治的、経済的、生物的、地学的な事象などにも必要に応じて扱うことができる」とあることを踏まえ、砂洲の形成を地学的に学習し、その土地利用を経済的に学習することをめざす。いっぽう歴史分野においては、新田開発や特産品の生産が近世期に盛んに行われたことを知ること（知識）や、新田開発の結果、各村の土地利用の状況を示す資料、特産品として生産されている梨の売買を示す資料など、地域に残る村方文書やそれらを編纂した自治体史を活用すること（技能）、そのような資料から読み取れることを思考し、地域の経済発展の特徴を説明できるようになること（思考力・判断力・表現力）などを課題としている。これは学習指導要領における「日本史探求」の「3 内容の取扱い(1)」に記されている「ウ 年表や地図、その他の資料を積極的に活用」し、「ク 地域社会の歴史と文化について扱うようにするとともに、祖先が地域社会の向上と文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ、それを尊重する態度を育てるようにすること」を踏まえ、砂洲上の村落が自然環境を利用して梨という特産品を生産し、貨幣経済が発展する近世社会に対応した歴史を学習することになる。それにより、地域社会の歴史のなかから近世期の新田開発や特産品生産などの社会経済としての歴史を理解することをめざす。

4. 単元の指導目標

- ① 地理・歴史を融合させて考察し、身近な地域を理解する態度を形成する。
- ② 身近な地域の地形の形成過程を知ることと、その地形の特徴を活かした土地利用の歴史を考察することができるようにする。
- ③ 身近な地域の地形や歴史などを自ら調べるための技法を修得し、主体的に学習する態度を形成する。
- ④ 歴史を有名な事件や人物からのみ理解するのではなく、地域の先人たちの不断の努力によって社会経済の発展をもたらしたことを理解することができるようにする。

5. 評価基準

- ① 海岸地形など、身近な地域に見られる地形を知り、新田開発や特産品の開発など、その地形を最大限利用して生産活動が活発に展開したことを知る。（知識）
- ② 地域の地形を確認するために電子地図やハザードマップを利用すること、地域の歴史を調べるために自治体史を利用することができるようになる。（技法）
- ③ 地形などの自然環境がもたらす条件の下で、それを活用して暮らしを成り立

たせ、生産を発展させた歴史的な過程があったことを理解し、それを論理的に説明することができる。(思考力・判断力・表現力)

- ④ 地域の歴史を、著名な出来事や有名な人物の活躍と言う事件史的な理解ではなく、特定の地理的な条件の下で、それを活用しながら日々の暮らしを成り立たせ、経済的に発展させた構造的な理解を形成することができる。(学びに向かう力、人間性等)

6. 指導計画（2時間扱い）

時間	学習内容と活動	支援
1	市川砂洲の形成と土地利用 ・海岸の小地形にどのようなものがあるのかを知る。 ・地形図を調べる技法を身に付ける。 ・地形の特質を理解し、それを活かした土地利用の方法を考察する。	・地形図を調べることができるサイトを教え、実際にアクセスさせる。 ・台地・低湿地・砂洲などの地形的特徴を活かした土地利用を理解できるように、歴史的な土地活用図を示す。
2	江戸時代の市川砂洲地域の利用 ・新田開発が盛んに行われたことを知る。 ・砂洲地形の土地の利用法として、果樹栽培が行われ、それが今日につながる特産品となったことを理解する。 ・地域に根付いて、その自然条件を活かしながら、そこに住む人びとが、その社会や経済を育んだ歴史を理解する視点を形成する。	・地域の地形に応じた新田開発が進んでいくことを、資料を示して理解に導く。 ・特産品の梨が、砂洲地形という自然条件を生かして生産されて来たことを示す。 ・事件史や人物史とは異なり、社会構造を学ぶことの意義を認識するように促す。

7. 地理分野（1時間目）の指導

- (1) 題材名：市川砂洲の地形と土地利用

- (2) 目標と評価基準：

- ① 海岸の小地形の名称と、その特徴を知る。(知識)
- ② 地形図をwebで調べる方法を知り、アクセスできる。(技法)
- ③ 地形図や地名など様々な地理情報から、その土地の地形的特徴を読み取り、ハザードマップを活用して、防災の意識を高めることができる。(思考力・判断力・表現力)
- ④ 市川砂洲の形成過程を理解し、その自然環境の利用方法について知ることで、身近な地域の地形から、その特質と土地活用法を考えられるようになる。(学びに向かう力、人間性等)

- (3) 展開：

	生徒の学習活動	教師の支援
導入 (5分)	千葉県の特徴的な海岸地形を見て、海岸地形に関心を抱く。そこから海岸地形の特質とその利用について学習することを知る。	学習テーマ説明 ・千葉県の特徴的な海岸地形をパワーポイントで示す。

(表のつづき)

	生徒の学習活動	教師の支援
展開1 (10分)	1. 海岸の小地形を知る 海岸地形について知る。	海岸地形を示す図を提示 ・パワーポイントを利用して、様々な海岸の地形を提示する。 ・プリントを配付し、各地形を代表する場所を紹介する。
展開2 (10分)	2. 市川砂洲の地形 2.1. 地形を調べる方法を知る ・国土地理院発行 2万5千分の1の地形図がどのようなものか実物を確認する。 ・国土地理院の地理院地図(電子国土web)にアクセスする。 ・埼玉大学教育学部谷謙二先生の研究室(社会講座人文地理学研究室)で作成した時系列地形図閲覧ソフト「今昔マップ on the web」を利用してみる。	地形を確認する方法を提示 ・国土地理院発行 2万5千分の1の地形図を提示する。 ・国土地理院のサイト https://maps.gsi.go.jp/ にアクセスさせて、様々な地図が閲覧できることを教える。 ・「今昔マップ」を紹介する。 http://ktgis.net/kjmapw/
展開3 (10分)	2.2. 市川砂洲の地形の特徴を知る ・市川砂洲が形成される過程を海岸線の変遷から理解する。6,000年前ごろから砂洲が形成されたことを知り、5,000年前のkokkijiraの骨が出土したことから、当時は浅い海になっていたことを判断する。 ・市川市の地図から砂洲地形を確認する。 (作業) 地形図を活用して砂洲地形を確認し、砂洲地形を色鉛筆で塗る作業を行う。	市川砂洲の形成過程 ・『図説・市川の歴史』に掲載された房総半島の変遷を示す図を提示し、地質時代の海岸線の変遷を考察させる。その時に、砂洲上の平田地区で、5,000年前のkokkijiraの骨が出土していることを紹介し、浅い海が形成されていたことを想像させる。 ・配付資料の地図に見られる砂洲地形を色鉛筆で塗らせる作業を通して、地形を認識できるようにする。
展開4 (10分)	2.3. 地名から考えられる土地の様子と土地の利用状況 1) 市川の景観 ・北部には下総台地と谷底低地があり、南部は沖積平野の行徳低地が広がる。その境界を成すのが市川砂洲であることを地形図から確認する。 ・市川砂洲が南北の低地を流れる河川の氾濫を防ぐ防波堤になっていることをハザードマップから確認する。 2) 地名 ・地名から、地域の地形の特徴を確認できることを知る。 3) 砂洲の利用 ・現在の市川砂洲の様子を確認する。砂洲上に黒松の植生が見られることと、周囲から数メートル高い微高地になっていることを画像から確認する。 ・明治時代、大正時代には市川砂洲上は果樹園として利用されていたが、やがて宅地化が進み、宅地部分は砂洲部分から南北に拡大していったことを土地利用図から確認する。 ・砂洲上で果樹栽培が行われた理由を、グループで考え発表する。	土地の利用状況を考察。 ・『市川市史 自然編』の記述内容を紹介し、地形の特徴を理解できるように導く。 ・市川市発行のハザードマップを示し、川の氾濫・決壊が予想される地域と、市川砂洲との関係を考えるヒントを提示する。 ・市川市教育委員会「市川市の町名」(『広報いちかわ』)に基づき地名が示す地形的特徴を紹介。 ・現在の市川砂洲を写真で紹介。 ・砂洲地形の植生として黒松の自生が見られることと、土地の高低について、画像資料を示して視覚から理解できるようにする。 ・明治時代、大正時代、昭和20年代、40年代、60年代の土地利用図を提示して、どのように土地が利用されていったのか、土地利用の変遷を示す。 ・なぜ砂洲上で果樹栽培が行われたのかを考えさせる。ヒントとして、砂洲上は地質的に砂丘と同じ砂地であることや、同じように果樹栽培地として利用されている地形に扇状地があることを

(表のつづき)

	生徒の学習活動	教師の支援
		提示する。
まとめ (5分)	身近な地域の地形の特質と、その特性を活かした人々の生産活動を理解する。	授業内容のまとめを提示する。

8. 歴史分野（1時間目）の指導

(1) 題材名：江戸時代の市川砂洲地域の利用

(2) 目標と評価基準：

- ① 江戸時代には、新田開発が盛んに行われたことを知る。(知識)
- ② 地域の歴史を探るために自治体史を活用することや、地域の図書館・博物館、あるいは史跡などを調査・活用することができる。(技法)
- ③ 統計資料や古文書から、どのように土地が利用され、生産活動がおこなわれたのかを考察し、畑や果樹園などの土地利用を、地形などの自然条件と結びつけて考えることができる。(思考力・判断力・表現力)
- ④ 自分たちが暮らす地域のなかに、歴史的な過程を見出すことができる。(学びに向かう力、人間性等)

(3) 展開：

	生徒の学習活動	教師の支援
導入 (5分)	地理編で学習した市川砂洲上の地域が、近世期の新田開発や、特産品生産などによって経済的に発展したことについて学習することを知る。	学習テーマの説明 近世期の新田開発と特産品生産に取り組んだ地域の歴史を学習することを説明する。
展開1 (10分)	<p>1. 近世の新田開発</p> <p>1.1. 新田開発の類型</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近世の新田開発として、代官見立新田や村請新田、町人請負新田などを代表とする形態があったことを知る。 ・新田開発を行うことで、近世には全国的に、耕地面積や石高が増大したことを理解する。 <p>1.2. 房総における新田開発</p> <ul style="list-style-type: none"> ・椿海の干拓による新田開発が行われたことを知る。 ・市川地域の新田開発の事例や、松戸市域においては、下総台地における畑の開発が行われた事例を知り、身近な地域に多くの事例があることを理解する。 	<p>1.1. 近世の新田開発</p> <p>近世の新田開発の形態を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイントを利用して、近世の新田開発の代表例や、新田開発を通して、耕地面積や石高が増大したことを説明する。 <p>1.2. 房総における新田開発</p> <p>近世の房総半島において実施された新田開発の事例を紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な地域に、新田開発の事例を見出すことができることを理解させる。 ・地名からの調査資料として、『日本歴史地名大系』（平凡社）などを紹介し、歴史のアプローチ法などを修得させる。
展開2 (10分)	<p>2. 市川新田の開発と市川砂洲の土地利用</p> <p>2.1. 市川新田の開発</p> <p>1) 開発者</p> <p>市川砂洲地域は、江戸時代にどのように開発されたのかを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名主の田中正成によって、江戸時代の初期に新田開発が行われたことを知る。 	<p>2.1. 市川新田の開発</p> <p>市川新田の開発者と、元禄検地にみる土地利用の状況を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新田開発を行った名主の田中家の墓所の写真を見せ、田中家の村落における立場を想像させる。 ・自治体史（『市川市史』）などを活用す

(表のつづき)

	生徒の学習活動	教師の支援
	<p>2) 元禄検地</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 検地の際の新田村の誓紙から、村中総出で対応していた様子を読み取る。 ・ 元禄期に実施された検地の結果から、市川市域の各村の土地利用の状況を確認し、田方と畑方の割合と地形との関係を考察する。 	<p>ることで、史資料を活用して地域の歴史を知ることができることを紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 検地誓紙の署名から、中世以来の名田百姓村とは構造が異なることを説明する。ただし、その土地所有は名主に集中していることにも言及しておく。 ・ 検地結果を示す表を提示して、各村の田と畑の面積の割合から、地形などの自然条件を反映させて土地を利用していることを読み取らせる。
展開3 (15分)	<p>2.2. 果樹園としての土地利用</p> <p>1) 市川の梨栽培</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 江戸時代中期に、八幡村の川上善六により梨が移植されたことと、江戸時代後期に制作された『江戸名所図会』から砂洲地域で盛んに栽培されるようになったことを知る。そこから、梨が特産品として成立したことを理解する。 ・ 江戸時代後期から明治初期における梨の立木が売買されていた史料から、梨の商品価値が高くなっていたからこそ、その立木の所有権が売買の対象とされるまでになったことを考察する。 ➡そこから砂洲の地形を活かした土地利用によって、商品価値の高い特産品を生産することができるようになっていったことを理解する。 <p>2) その他の果樹栽培</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 砂洲上では、梨以外にも桃や苺の栽培が行われたことを知り、地形を利用した特産品の栽培が行われたことを理解する。 	<p>2.2. 果樹園としての土地利用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 川上善六の事績の顕彰碑の写真を見せる。 ・ 『江戸名所図会』の「梨園」の項を示して、砂洲上に展開した梨園が「名所」として認識されていたことを示す。 ・ 『市川市史』に掲載された立木の売買を示す史料を提示する。そこから、梨の立木が取引された理由を考えるように導く。 ・ 市川歴史博物館所蔵の古絵葉書や、昭和3年の鳥瞰図から桃林が形成されていたことを示す。 ・ 「市川のまち 地名の由来」(『広報いちかわ』掲載記事)の記載内容から、苺栽培が盛んであったことを紹介する。
まとめ (5分)	江戸時代の農民は、地域の自然条件に適応した生産活動を行い、新田開発や特産品の生産などに積極的に取り組み、貨幣経済の進展に対応していったことを理解する。	授業内容のまとめを提示する。

9. 思考の構造

【事実認識の第3段階】

《この単元における到達すべき事実認識》

近世の農民は、自らの住む地域において、地形などの自然条件を活用した生産活動を展開し、特産品などの生産に取り組み、貨幣経済の進展に対応していった。

【事実認識の第2段階】

- ・身近な地域の土地利用として、洪積台地では畑、沖積平野では水田と、その地形的特性を活かした人々の生産活動が展開した。
- ・砂洲地形は土壌が砂地であり、砂洲上は畑として利用された。

- ・砂洲上は、近世初期に新田開発され、元禄検地では惣百姓で対応した。
- ・砂洲の地質を果樹園として利用し、梨という特産品を生み出した。
- ・梨は、その商品価値を高め、立木の権利も売買の対象となった。

【事実認識の第1段階】

- ・海岸の小地形として砂洲地形があり、市川市にもその地形が存在する。
- ・市川市域の地形は、北部は下総台地と谷底低地、南部は行徳低地、その間に砂洲地形が形成されている。

- ・近世期に新田開発が推進され、砂洲上の地域にも新田を形成した。
- ・北部は畑としての土地利用の割合が多く、南部は水田の割合が多い。

- ・近世期に八幡地域に梨が移植され、現在も市川市の特産品となっている。
- ・『江戸名所図会』にも八幡の梨園が描かれている。